

特集 ゆるぎない英語力を育成するために

即興で話す力を育てる指導

—USE Speak 会話の活用—

鈴木 悟 (東京都立両国高等学校附属中学校)



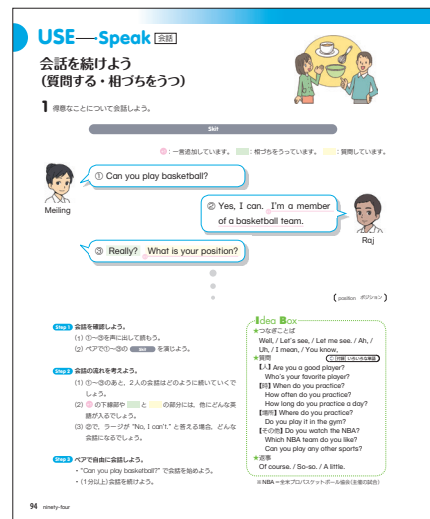
はじめに

英語の授業では、生徒同士で会話させてみると、会話が成立しなかったり、会話がすぐに止まり沈黙してしまったり、言いたいことが言えなくて日本語が聞こえてきたりすることもある。

実際に会話を終えた生徒に感想を聞くと、「時間があれば思い出せた」「言いたいことを(直接)表す単語や文法がわからなかった…」など、その多くが教科書などで学習した既習の定型表現を、言いたくても瞬時に発話できていないことがわかる。その原因は、主に次のようなことが考えられる。

- ・日本語で考えてそのまま英語に直訳してしまう
- ・自分の語彙レベルで言いかえることができない

Book 1 Lesson 7 USE Speak 会話



【指導のポイント】：リアクション／相づち／アイコンタクト／つなぎことば／確認(サマライズ・エコー)／一言で終わらない質疑応答力(事実+感想, 事実+具体例, 事実+感想+質問など)／など

定型表現の自動化を目指したアウトプット活動

日本語を英語に直訳しないためには、瞬時に口から出てくる定型表現などを増やし、会話を継続する力や即興で話す力を育てることが鍵となる。

28NCでは、各学年にUSE Speak 会話(チャット活動)が設定されている。しかし、左下のBook 1 Lesson 7の例のように、チャット指導のポイントは多岐にわたるため、全てを1~2時間で教えるのは、生徒への負担も大きく難しい。

そこで、教科書がGETからUSE、そしてProjectに向かって構成されている点を上手く活かし、USE Speak 会話を目標として、次のように段階的に指導し、暗唱・発表レベルまで高めていくことで、学習の定着を図ることができる。

《USE Speak 会話を目標とした段階的な指導例》

- ① Lessonの各パートの導入時に、挿絵や写真のピクチャーカードを活用して、生徒が写真描写 (picture description) を行う。
- ② GETやLet's Talkのdialogを使って、リアクションや相づちなどを入れながら、skitやplus one dialogの活動を行う(ペアで会話や音読練習をし、クラスの前で発表を行う)。
- ③ Lessonのまとめとして、GETやUSE Readの本文の内容に、自分の意見や調べたことなどを加えて発表するoral presentationの活動を行う。
- ④ Projectでスピーチやプレゼン、インタビューなどを行う際は、リハーサルなどを行い、全員が自信をもって話せるまで高める。
- ⑤ USE Speak 会話では、ペアで練習したあと、ALTとの会話を行い、定型表現を定着させる。

自分が持っている単語を工夫して使う力

会話のあとには、「英語で言いたかったけど言えなかったこと」を生徒に書き出させるとよい。そうすれば、既習の定型表現を使って、「言いたいことが表現できる」ことや、「言い方は何通りもある」ことに気づかせることができる。特に学習の初期段階では、この発想とやり方をクラス全体へフィードバックし、共有することが大切だ。

また、学年が上がれば、話す内容も込み入ったものになるため、今ある自分の語彙を使って表現する力を身につけることが、会話を継続する力や即興で話す力を育てるための、もう1つの重要な鍵だ。例えば、生徒が次のような会話をしていくとする。

A: I like sports very much.

B: Why do you like sports?

A: …(日本語で)気分が爽快だから。

Aの生徒が英語で言えなかったことは、「スポーツをすると気分が爽快になる」だ。接続詞などを学習していない1年生には易しくはないが、ここでは「I play sports, and I'm happy.」など、既習の簡単な表現で言うことができる。つまり、的確な定型表現や語句が出てこないときは、似た意味の表現や語句で代替したり、状況を細かく映像化して順序立てて説明したり、具体例をあげて説明したりしながら、やりくりできるようになることが肝心だ。

さらに「瞬時に言えない」「言いかえもできない」という場合は、伝えたい内容の2割程度、つまり本質的なことだけを相手に伝え、残りは「言わない」という考え方もあることに気づかせたい。

そのような気づきを体験していくことで、日本語で考えたことを英語に変換するよりも、英語で考えたことをそのまま言ったり、状況を映像化しながら言える部分だけを英語で言ったりするほうが簡単だと気づく生徒も出てくる。また、それによって、前述①の活動を行うときの、生徒の取り組む姿勢も変わってくる。

考えがなと言えないことに気づかせる

Why (do you like ~)? / What do you think of ~? と聞かれた場合、日本語でも応答に困ることが

あるように、自分の意見や考えなど、何か伝える内容がないと英語でも言うことはできない。つまり考える訓練が必要である。幸い、伝統的にNCでは生徒に深く考えさせる題材が多いため、前述の③ Lessonのまとめのoral presentationや④ Projectなどの活動を行うときも、詳細情報(理由・具体例・感想など)を追加して自分の意見を述べさせることができる。これは、会話の継続につながるだけでなく、ディスカッションやディベートの基盤にもなる。

会話では質より量を重視する

会話の練習では、正確さを意識するよりも、生徒の発話量を増やすことが重要だ。発話量が増えれば、相手に伝わる情報量が多くなり、聞き手の理解が深まったり、会話の有益性が上がったりするからだ。

発話量を重視するという事は、英語の正確さについて指導しないということではない。例えば、話した英文をノートに書かせ、あとでそれをチェックすることで正確さの指導をすることもできる。

ALTとの会話で自信をつけさせる

本校では、授業中、別室にいるALTのところへ生徒が行き、1分間話す活動を継続させている。「ALTに自分の英語が伝わった」という達成感・成就感は、コミュニケーションへの関心・意欲・態度を高め、生徒の自信につなげることができる。

一方で、生徒の声が小さくてALTが聞き取れず、聞き返すことがある。それが原因で自信をなくしてしまう生徒も少なくない。英語が上手でも、伝える内容があっても、相手に聞こえないとメッセージは伝わらない。大きな声で話すことは、英語活動全体の大切なポイントであり、1年の入門期(発話、スピーチ等)から繰り返し指導していく必要がある。

おわりに

授業は、教師と生徒、生徒同士の信頼関係がないと成り立たない。特にUSE Speak 会話は、生徒同士の会話を中心であり、相手から多くのことを学び、互いに協力するからこそ成り立つ活動だ。それ故、会話の最後は、お互い「Thank you.」や励ましのことばを言って終わらせたい。

NEGIISHI MASASHI
TAJIMA OSAMU
HIDAI SHIGEKI
MATSUZAWA SHINJI
SUZUKI SATORU
KENO OSAMU
KUDO YOJI
HIMAI HIROKI
SAKAI HIDEKI
TANABE YUJI
TAJIMA MISAKO